

生活改善を目指す「実践的総合科学」としての家政学 1940年代の今和次郎の言説をもとに

渡瀬典子*

(2015年2月12日受理)

Noriko WATASE

Home Economics as a Practical Integrated Science for the Improvement of Living:

Wajiro Kon's Articles in the 1940s

I. はじめに

2008(平成20)年、文部科学省は「大学教育の分野別 質保障の在り方」について日本学術会議に審議を求めた。家政学分野は健康・生活科学委員会において参照基準検討分科会が設置され、2013(平成25)年に参照基準が発表された。同参照基準における家政学の定義は、日本家政学会が1984(昭和59)年に発表した「人間生活における人と環境との相互作用について人的・物的両面から研究し、生活の質の向上と人類の福祉に貢献する実践的総合科学」を再確認している。また、「方法論における独自性」に「学際的方法」と「実践的方法」を挙げ、両者を連動させることで生きた理論となり、「家庭や地域の生活の向上に寄与することができる」と述べている。すなわち家政学を修めることで「人の生き方・暮らし方を選択する能力、社会の変化に対応して生活を組み立てる能力、次世代や他者の生活を支援する能力、生活に関する専門職に就く能力」を身に付ける「実践性」が期待されている。

家政学の在り方は、日本国内のみならず世界的にも検討が試みられている。例えば、国際家政学会(以降、IFHEと記載する)が2008年に出したポ

ジションステートメントでは、4側面/実践領域(社会、学界、日常生活、カリキュラム)において今後の家政学が発展するための方策として、政策に影響を与え発展させる研究、ウェルビーイングとエンパワメントの提唱、若手研究者の育成、新しい思考法の創出が提言されている。以上のように、現代の家政学は国内外ともに「実践的総合科学」の学問としてその在り様が追究されつつある。

日本の家政学にはこれまで幾つかのエポックがあった。その一つが学問分野としての成立、日本家政学会創設に見ることが出来る。日本家政学会が設立された1949年頃まで、様々な分野の専門家が家政学に関心を寄せてきた。これらの人物の一人に今和次郎(1888-1973)が挙げられる。今和次郎は東京美術学校図案科(現・東京芸術大学)を卒業後、早稲田大学に1912(明治45)年から1958(昭和33)年まで建築学科の教員として奉職した。大正期には日本の民家研究のきっかけとなる「白茅会」への参加、農商務省農村住宅調査嘱託で全国の農村住宅の視察にも加わっている。今和次郎の業績として最も知られているのは「考現学」の提唱といえよう。彼は考古学が遺物や記録から当時の生活実態を分析することになぞらえて、人々

*岩手大学 教育学部

の服装・髪型等、現実の生活の姿を定点的に観察し、その様子をデータ化し、分析する試みを「考現学」の中で展開した。今のデッサン力を生かした「考現学」の成果は、1927(昭和2)年、彼が39歳の時に開催された「しらべもの(考現学)展覧会」で人々の耳目を集めることになる。また、ここでの関心が後年の「服装研究」「生活文化論」につながっていく。

今の別の側面には、戦前～後の生活改善運動との関わりがある。今は1936(昭和11)年に東北更新会指導委員、翌年に東北地方農山漁村住宅改善調査委員を拝命した。東北地方農山漁村住宅改善調査は、1935(昭和10)年から6年間、日本学術振興会が同潤会に委嘱して行われた事業であり、現地の実態調査などが実施された。当時の東北地方は度重なる凶作や自然災害によって疲弊し、都市との生活格差も顕著だった。ちなみに今は中学を卒業するまで青森県弘前市に居住していた。また、この頃、秋田県の生保内(現在の秋田県仙北市)において地域の生活改善の拠点となる「生保内セツルメントハウス」の設計に携わり、地方の生活改善に従事する機会を得ていた。1941(昭和16)年には、東宝文化映画「農村住宅改善」を監修、出演するなど東北地方に縁のある人物でもある。

今和次郎が家政学との関わりを持つようになったきっかけは、以上の事柄も大いに関連しているが、直接的には「家庭科学研究所」との関わりが挙げられる。「家庭科学研究所」は1934(昭和9)年5月3日、大日本連合婦人会(連婦)と財団法人大日本連合女子青年団(女青)の合同施設として設立された。初代所長は当時、日本女子大学校長を務めていた井上秀である。設立当時の活動目的は「家庭科学ニ関スル調査研究ヲ行ヒ家庭生活ノ充実家庭教育ノ振作ヲ図ル」ことであった。また、研究所の業務は「現代の科学と文化より切り離され、旧態依然たる家庭生活を対象としてこれを科学的に研究し、且つその研究を普遍化して各家庭を科学せしめるまでに指導」することであった。彼は1934(昭和9)年に家庭科学研究所の研究委員になり、第二次大戦を経た1948(昭和23)年、前

任者だった井上秀の辞任に伴い、研究所所長に就任することになる。そして85歳で没する1973(昭和48)年まで四半世紀もの間、家庭科学研究所所長として在任した。家庭科学研究所は1997(平成9)年に組織がなくなるまで60年以上もの間、戦時下の時代には当時の生活問題に関する活動、第二次大戦後は家庭科教員の養成や啓蒙を担う機関として機能していた。このような環境の中で、今和次郎は家庭科学研究所の機関誌である『家庭科学』に1940年代から50年代にかけて家政学・家庭科教育等に関連する論文・エッセイを積極的に寄稿している。

そこで、本研究は1940年代に今和次郎が「家政学」に寄せた期待は何だったのか、彼が後年家政学や家政学関係者に向けた批判や焦燥感の対象の源が何だったのかを明らかにすることが主要な目的である。また、冒頭に言及した「家政学分野の参照基準(2013)」等、現代の家政学における理論枠組みと今和次郎の「家政学」の概念モデルとスキル形成観との比較から、家政学における歴史研究の一つとして今が果たした役割を再考する。

II. 今和次郎と家政学に関する先行研究

これまで言及したように、今和次郎は幅広い分野の実践・研究に携わってきたため、彼に関する先行研究も多岐に渡る。今の家政学に関する先行研究としては、戦前・戦中の著作の分析(野崎2014)のほか今和次郎と親交があった内井乃生の研究に詳しい。内井は、1971(昭和46)年～1973(昭和48)年に初版された『今和次郎集』(全9巻)に所収された『家政論』の編集に携わり、同書の後記で、1940年以降の今の研究関心の推移を以下のように分類している。(1)1940-45年 生活学胎動期、(2)1945-48年 家政学提唱期、(3)1948-50年 家政学体系樹立期、(4)1950-53年 家政学低迷期、(5)1953-57年 家政学より生活学への転換期、(6)1957-60年 生活学育成期、(7)1960-70年 考現学・人類学・民俗学・民族学・社会学・歴史学などを総合した生活生態学の提案(1971)、

考今会(生活学会) 発会宣言, よって本研究では内井の分類(1)～(3)が分析の中心となる。

内井は「今先生が『家政学』とよび, その必要性と学問への具現化に努力されたのは, 1945年から1950年ぐらいのこと, 戦前の家庭生活が崩壊し, 戦後の民主主義社会における新しい家庭生活のあるべき姿を探求するための必要な学問としての『家政学』を提唱された」と述べている(内井1971)。また, この時期, ^{こん}今は相模書房から『家政のあり方(1948)』, 『家政学のために(1950)』という題名に「家政」を冠した単行本を出版している。

Ⅲ. 研究方法

本研究は, 今和次郎が当時構想していた家政学の枠組み概念を知るために, 1940年代に主に書かれた彼の家政学に関する「講演ノート」を用いる。この「講演ノート」は, 今和次郎が勤務していた

工学院大学で現在「今和次郎特別コレクション」の一部として収蔵されている(彼の死後, 蔵書とともに工学院大学に寄贈)。「講演ノート」には当時の講演内容の構想が簡単なメモ, 図で表されており, 彼の主張を端的に表すものと捉えられる。

次に, 今和次郎著作の論文・資料として家庭科学研究所が1940(昭和15)～1950(昭和25)年に発行した『家庭科学』及び『家庭科学月報』の66件を主な分析対象論文とした(表1)。「家庭科学」は研究所ができた1934(昭和9)年から研究所がなくなった1997(平成9)年まで発行された。『家庭科学月報』は1936(昭和11)年から1939(昭和14)年まで『家庭科学時報』という名称だったが, 対象読者は一般家庭, 学校団体指導者, 女子学生等が想定されていた。内容は, 『家庭科学』に比べ, より生活実態に密着し, 具体的かつ即時性のあるものであった(当初10ページ程度の小冊子体だったが, 1940(昭和15)年からは名称が『家庭科学月報』注1)に改称され, ページ数も約5倍に増え

表1 『家庭科学』, 『家庭科学月報』に掲載された今和次郎の論文(1940～50年: 66件)

年	論文・雑誌記事タイトル
1940 (S15)	「銃後家庭経済座談会」N18「生活の地理学」N19「巻頭言」47「巻頭言」48「巻頭言」54「風俗時事解説」55
1941 (S16)	「栄養指導者の闘ひつゝある実情を見て」58「消費生活の統制」63「文化映画『農村住宅改善』(解説)」63「衣類の単純化について」66「研究・指導・教育」67, 「生活態度の問題」68
1942 (S17)	「巻頭言」70「生活政策と生活教育」72「生活戦線」74「生活の実験」76「巻頭言」77「農村文化について」78「家庭生活の目標」80
1943 (S18)	「生活整備の年」81「家庭生活設計の一重点」82「合理化主義と間に合わせ主義」84「耐乏生活の研究」85「決戦生活工夫欄」85「農村記」86「女子動員と家庭生活」91「過渡期の現象としての家庭経済における金と物との交錯」92
1944 (S19)	「家政科手帖」93「時局の変転に伴ふ生活内容の転換」95「勤労女性と教養の問題」97「自給生産と慰楽」98「食物と慰楽」99
1946 (S21)	「仮家住態いろいろ」104「今後の住宅設計および設計」105「家政学の貧しさ」105「食生活の革命と生活の明朗化」106「ある寄宿舎の問題<家庭知識>」107
1947 (S22)	「家庭生産への歩み」108「耐乏への叫び!」113
1948 (S23)	「明るい家庭生活への道」117「生活の美化」118「男子のクラスで生活を講じて」120「アメリカ生活をうけいれる態度について」121「生活と芸術」122「農村生活改善を促進する機構」123「学問が冷たくなる惧れ」124
1949 (S24)	「家政学部とは」126「住習慣を切りかえる実験としての戸山集団団地」126「家庭について」127「質による生活の段落」128「わが国の家庭科の特性」129「巻頭言」130「家庭生活の分析一」130「家庭生活の分析二」131「家庭生活の分析三」132「慣習をなおすための指導」133「休養学への空想」134
1950 (S25)	「礼法について」134「クリスチャンの家庭とサムライの家庭」136「生活改善にかかわる問題」137「家庭科の概念について」138「衣食住と家族関係」139「生活芸術科の任務」140「洋服と和服」141「新しい生活地理」142「生活病理の探求」143

注)表中の数字は巻号数で, Nは『家庭科学月報』を示す。

た)。以上の資料をもとに、彼が当時家政学へ抱いた期待・批判を読み解いていく。

IV. 結果

1. 今和次郎の「講演ノート」に現れる家政学の枠組み概念図

1939(昭和14)年の家庭科学研究所は10の研究部門として、家庭管理(家庭統制,家事経済,産業組合,副業,家庭,能率),家庭教養(修養,信仰,子女教育,結婚,性,趣味娯楽),家庭保護(育児,衛生,看護,医療,運動),家庭栄養(栄養,食品,調理),被服(衣服原理,整理,調製),住宅(家具什器,室内装飾,庭園),家庭商品(商品ならびに消費に関する知識),家庭工作(手芸,廃物利用,修理),社交礼儀,整容(美容,着付け)を有していた。これらがすべて家政学の対象とされていたわけではなかったが,かなり幅広い領域を対象にしていたことがわかる。本項は,工学院大学所蔵の今和次郎の「講演ノート」から当時の彼の

家政学に対する概念枠組みを探っていく。今は,当時の農林省(現在の農林水産省)による生活改善普及事業に関わり,各地の生活改良普及員への助言を行ってきた。「講演ノート」には,生活改良普及員を対象にしたと思われる地方での講演のほか,家庭科学研究所が主催する夏期講演会の講演の骨子がメモ書きされている。その中には文章だけではなく,図案科出身で,「考現学」を提唱・実践した今ならでの家政学についての概念図が書き留められている。

図1は,1949年10月30日の日付があるが,具体的な講演に関する記述はない。この図に現れるように,今は,人間関係の側面(人的生活技術),衣食住の生活の営みを「科学・経済・美」的に捉えた「生活の物的技術」について,それぞれの家庭・社会の現実から捉える家政学の概念図をノートに記している。ここでの「社会」は,全国一律の社会情勢を総称しているのではなく,個々の家庭がそれぞれにおいて関わる「社会」を意味する。また,空間的範囲だけではなく,「時代による様式」

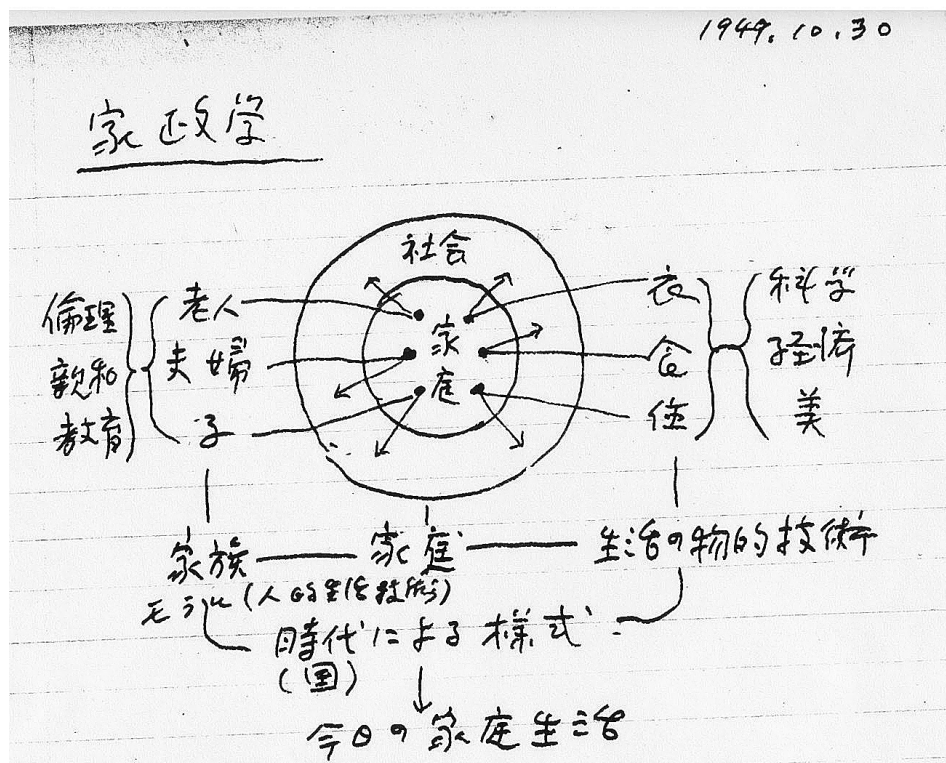


図1 今和次郎の「講演ノート」に記載された「家政学」の概念図 (1949)

の変化から「今日の家庭生活」を考へることが想定されている。

この講演に先立つ1949年8月1日の家庭科学研究所 夏期講演会用メモを見ると、6つの筋立てがある。

1. これまでの家政学, 2. 今日の家庭科の立場,
3. 家庭生活の中に含まれる要素(人文科学的に分析), 4. 結局, 生活観が問題, 5. 地方家政学の個性, 6. 結び

この中で、「5. 地方家政学の個性」に先述した彼の概念図の意図が見える。「6. 結び」では、「①家庭科の研究態度を述べる^(ママ)につきたかもしれない。②家政学を客観する力を養う。③新憲法に合致するように生活の構え方を方向づける^(ママ)努力をすること。④これからの家政学の築かれる途だと思ふ」という書き込みがある。

同月3日には、高松市において「婦人団体、農村指導者(生活改良普及員のことと思われる)等」を対象にした講演をしており、「生活文化の将来」では、「生活というもののあり方を歴史的に考へる^(ママ)、封建時代・公家時代・武家時代・明治大正今日までの生活→日常生活の無自覚、衣食住の

在り方」という書き込みがあり、時間軸から見る生活文化の分析について言及している。また、「生活科学化の拡大強化」の方策に「社会面にも一つの焦点を向ける」と書かれており、ここにも家庭と社会の関係性から見た生活実態の把握と生活科学との融合が企図されている。1940年の論文には「家事学の目的はもともと現実の生活の改善向上ということにあるのだから、所謂学術的に進歩したそれとは別途に、あるいは学術的に一層進歩させることへの努力とは別途に、現実の生活を向上させる手段方法をいかにすべきか、という第二の考へにも忠実でなければ、家事学全体としての責任を果たしたとは言えず、なんら指導性をもたないということになる」(今 1940a)と述べられ、この主張は彼の一貫した立場だといえる。

図2は1949年に「講演ノート」に書きこまれた概念図である(日付はない)。この図を見ると、家政学の二分野は「家族関係(家族制度)」と「衣・食・住(生活科学)」であり、これらの総合が「家政学」と明記されている。「家族関係」の内容については「在来の家政学は人的、精神的なる style は批判することなく与えられたまま、専ら物質面だけの合理化、進歩化に集中していた。歴史の研究は現実を客観的に反省する効果、また、外国の生活様式の研究も同様の効果」と書かれている。同年に出された論文を見ると、「まず家庭生活そのものの分析が必要とされる。そして生きて動いているものであるといえる生活の分析は、それは自然科学で対象とすべき領野ではなく、人文科学あるいは文化科学の領野だといわなければならない」と述べられており(今1949a)、自然科学だけに傾斜しない家政学の研究の在り方への言及がある。また、「家政とはいふまでもなく生な現実であるが、その設計をどうするか、ということが家政学の出発であり、また終局でなければならないはずである。その中に含む要素として育児、衛生、衣、食、住、経済等があげられるとしても、それらは家政の中に含まれるそれぞれの面であって、育児学すなわち家政学ではなく、衛生学も、衣服学も、食物学も、また住居学も、もちろん家政学

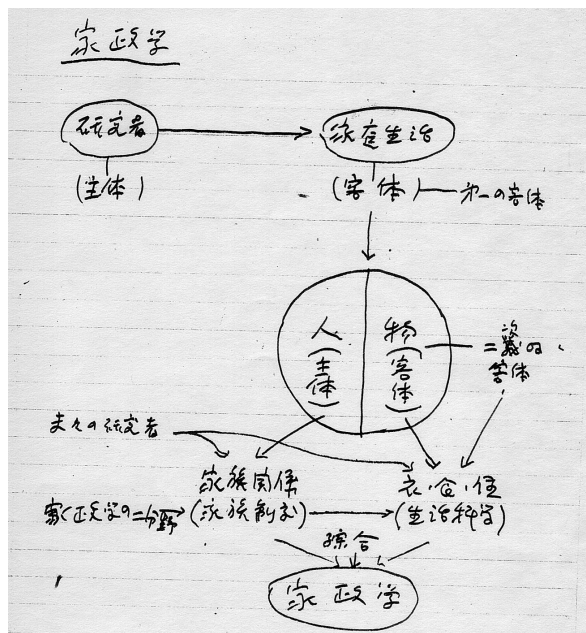


図2 今和次郎の「講演ノート」に記載された「家政学」の概念図(1949)

そのものではない。それらの要素ががっちり結びつけられる姿が家政であり、それを対象として家政学が築かれなければならない(今 1949b)とも述べられている。『今和次郎集』に収められた「生活学・家政学に関連の学」の図には、「衣・食・住・育児・衛生・家計」の6分野とそこから派生する「自然科学・文化科学・社会科学」の15学問領域(等々と書かれた箇所も複数見られる)が示されているが(今1951a; 1971), 各学問領域でどの要素を切り結ぶかには言が及んでいない。これは、彼が既存の家政学から後年、「生活学」へと意識が向かう経過が窺われる。それでは、当時の彼は家政学に対してどのような事柄を考え、期待したのだろうか。

2. 今和次郎の家政学(家庭科教育)への期待

1940年代の今は住生活の改善を中心に、農山漁村の人々がよりよい生活を営むための助言・指導を行っていた。彼は人々の生活問題を解決するにあたり、「家政家事学は国民生活の指導書たるべきもの」(今1940b)であり、「家事科教師あるいは生活指導者というものを権威づけて、組織化して、それぞれの地方生活を更新していく本現地として活躍させたい」(今1942a)という積極的な構想を語っている。生活改善普及事業等を通して地方の生活実態に触れた今は、「地方の家事に関心を持つ者としては現状の不徹底な状態に慙愧して大いに積極的に努めなければならないと思わずにはいられない」(今1940b)と感じていた。そのためには、家政学を修め、地域の生活に根差した家庭科教師に期待を寄せていたといえる。「家庭科の教師こそ、生活指導者としての自負心を抱くことで、それを力として生徒たちを導いていくのでなければなるまいと提唱したい」(今1948b)という言にもその思いが現れている。また、「現在のわが国の自分の家庭の生活は不合理を含んでいるということを見抜く能力」の育成、「新しい憲法に則して、国民に対して生活についての新しい物尺を与えること」(今1949a)を、家政学や家庭科教育の役割として求めていた。また、第二次大戦

後に家庭科教育、家政学の実践方法としてアメリカから導入されたプロジェクト法を用いた「ホームプロジェクト」にも言及し、「国民の生活の現実を一層客観する方向へと教師もまた生徒も、学習の課題で実行する傾向となった」(今1949b)と述べている。今は、現実の生活課題から学習を構想し、自分・家庭・社会に働きかける「ホームプロジェクト」の特性を評価した背景には、生活改善に対するある考え方が起因している。彼は、現実の生活様式はそれまでの習慣の積み重ねで形成されたものであり、生活改善が必要であるならば、習慣そのものを変えるために頭で考えるだけではなく、実際にやってみることを重視した。また、「ホームプロジェクト」で見られるように、学習者が指導的立場になって第三者に啓蒙する場面によって、真に生活様式が変えられると捉えていたのである。よって、プロジェクト法を導入した家政学や家庭科教育、さらには家庭科教師に対し、今和次郎は大いに期待を寄せていたと考えられる。

3. 今和次郎の家政学(家庭科教育)への焦燥

前項で述べた今の家政学への期待は、先述したように、次第に「焦燥」と化し、後に批判の割合が増していく。今は家政学について言及した初期の時代には、「家政学」と「生活学」等の名称をはっきり分けていないが、「在来の『家事学』あるいは『家政学』という名目を、この際『生活学』あるいは『国民生活学』とでも改称することが適切ではないかと私は考える」(今1940c)と記述している。これは、今は家政学の対象において個人・家庭と社会との関係性を重視した問題意識に起因するものであり、この時期は批判というよりは、家政学の変革と発展を期待したと解釈することもできる。

当時の今の家政学・家庭科教育に対する焦燥と批判の対象は、旧態依然の学習内容、そして理論と実践が遊離した学習方法に対してだった。前者については、今の家政学の概念図のところ而言及したように、「家族関係」など社会科学的な側面からの学習の不備であった。「心の問題は文芸そ

の他にまかせるといふ風にほったらかしにして、結局、生活の具体的、物質的方面に限定したかのごとき素振りをした。そのことが大きな疑問、取り返しのつかない弱点を生んだのである」(今1943)と述べている。

今は自らが理想とした家政学実現のために、生活改良普及員と家政学者や家庭科教師の交流を期待していた。それは、「現地で指導することの体験の幾許かを教壇に立つ人たちにもぜひ持ってほしい。現実の生活を知らずに教室だけで生活を説くことは教える際の迫力にも係ってくるのであるが、それがなかったことがこれまでの家事家政の教師の弱みだったといわなければなるまい」(今1948b)という言にも表れている。その後、「今のところ、到底、家庭の生活と教室の知識とを一枚のものとなし得るような予想をもてない状態だといわねばなるまい」,「学者たちは往々にして自らの家庭生活そのものを習慣のままに進行させて、そのことに何らの矛盾を感じていない場合を想像できるのであるが、それでは根のない『家政学』しか栄えまい」(今1949c),と舌鋒が鋭くなっていく。1940年代における今和次郎の家政学に対する見方は期待と批判が表裏一体だった。彼は現実の生活問題の解決に焦点を当て、学習を組み立てるアメリカの家政学における「実践問題アプローチ (practical problem approach)」にも似た考え方を評価していた。当時の家政学・家庭科教育の実践の一部にも実践問題アプローチに近い萌芽的な試みはなされていたが、主流とは言えなかった。「実践的総合科学」としての家政学であるはずが、個別の学問領域に落とし込まれて総合化されないこと、家政学の知識が生活実践に結びつかないことも、晩年の今和次郎の家政学への批判につながっていく。例えば、雑誌『被服文化』における彼の言が挙げられる。今和次郎は1950(昭和25)年、学際的に服飾文化にアプローチする雑誌『被服文化』の発行を担う「被服文化協会」の理事長にも就任した。この雑誌の中で後年今は「二〇世紀の学校家政学は一九世紀のそれへの造反活動として、生活の合理化という旗のもとに家政学を

押し進めてきた」が「学校の抽象家政学は、(農村の生活問題解決には)歯が立たない」と批判している(今1971)。

内井は、今の晩年に全集を発刊する経緯の中で、「今家政学」が「生活学(家政原論:理念,生活方策:様式,生活改善:手段)」と「考現学(実態学,生態学)」で構成されており、既存の家政学とは異なるものだと解釈した。また、この本は当初『家政学』という題名であったにもかかわらず、“女子大学で使われていた「家政学」との同一視を避けたい”,という今の意向を受けて改題したエピソードを内井は繰り返し語っている(内井1971,1988,2011)。同一視を避けたかった理由は、当時の大学の家政学が「家事技術の合理化,科学化の学問」に終始し、彼がねらう実践的な生活改善を担う家政学のイメージと大幅に異なったからだった。

IV. まとめ

家政学がアメリカで成立してから100年以上が経過し、冒頭で述べた学会レベルでの「家政学の在り方」の検討に加え、近現代の社会において家政学がどのような役割を果たしたか、歴史的検証が試みられている(Elias 2008,Goldstein 2012)。日本では第二次大戦後、アメリカからの助言を受けながら、日本家政学会の創設がなされた。その第1回総会(1949)に、今和次郎は出席していたが、時を経るに従い、家政学との関わりは希薄になり、親交のあった人々(竹内芳太郎,川添登など)とともに最晩年、「日本生活学会」を創設するに至る。建築・デザインの分野にいた今が様々な事業に関わる中で生活研究、「家政学」に1940年代傾斜していくが、そのとき寄せた期待は何だったのか、そして、後に批判や焦燥感へと変わる対象が何だったのかを明らかにすることが本研究の主要な目的であり、この結果から、現代の家政学の課題、現代家政学史の一つとして今が果たした役割を再考した。

今和次郎は家政学に対して、(1)地域にあった

暮らし方を探求しつつ、豊かな生活に向かう生活習慣の変革をもたらす学問領域／科目になりうる

(2) 現実の生活の観察に基づいて、過去・現在・未来を相対化し、生活の分析ができる (3) 生活の分析と実践化を通して、社会に影響を与えることができる、ということを期待していたと考えられる。これらの3点は「家政学分野の参照基準(2013)」あるいはIFHEのポジションステートメントに挙げられていた家政学の役割にも通底するものである。しかし、今和次郎が家政学に寄せる期待は(1)「現実の生活」に対する視点の不在(2)家庭生活対象の学問でも、社会との関わりに対する視点が少ない(3)自分の生活(=習慣)課題に根差す内容・実践になりえていない(4)家族関係に関する学習内容・指導の不足、といった焦燥感や懸念、批判へと変わっていったと捉えられる。

1950(昭和25)年に発行された『家政学のために』の序文には、「この文を書いている期間において、家政学や家庭科教育の問題はそれぞれの当事者をずいぶん悩ましたものだった。なにしろ国民の生活様式を新しく建て直すその中軸の責めを負っているのが家政学であり家庭科教育だといわなければならぬからである」と記している。今が家政学に高い要求を課してきたのは、人々の生活を豊かにする生活改善を目指すことができる学問=家政学、という「期待」によるものだったのではないかと推察される。そして現在もこの見えないハードルは存在し続けているのかもしれない。今後の研究課題として、今和次郎が推奨した当時の生活改良普及員と家政学関係者、家庭科教員との連携事例について分析を試みたい。なお、本研究は平成25年度科学研究費補助金基盤研究(C)(課題番号：23500871)の助成を受けたものである。

謝辞

本研究における資料の一部は工学院大学「今和次郎特別コレクション」による。この場を借りて、工学院大学名誉教授 荻原正三先生、工学院大学図書館の皆様にお礼を申し上げます。

<注>

1) 『家庭科学月報』は、戦時下にあった1941年、警視庁特別高等警察部検閲課から「家庭婦人関係新聞雑誌整理統合」の懇談のため出頭要請され、ここでの懇談後、同年7月に廃刊になった(森本1990)。

<引用・参考文献>

- Elias, M. (2008). *Stir it up Home Economics in American Culture*. University of Pennsylvania Press
- Goldstein, C. M. (2012). *Creating Consumers Home Economists in Twentieth-Century America*. The Univ. of North Carolina Press
- IFHE. (2008). *IFHE position statement 2008: Home Economics in the 21st century*. Bonn, Germany
- 川添登. (1985). *生活学の誕生*. ドメス出版, 185 p.
- 今和次郎. (1940a). 巻頭言. 家庭科学 No. 47. 家庭科学研究所, 1
- 今和次郎. (1940b). 生活の地理学. 家庭科学月報 No. 19. 家庭科学研究所, 3-4, 14
- 今和次郎. (1942a). 巻頭言. 家庭科学 No. 77. 家庭科学研究所, 1
- 今和次郎. (1943). 合理化主義と間に合わせ主義. 家庭科学 No. 84. 家庭科学研究所, 4
- 今和次郎. (1948a). 家政のあり方. 相模書房
- 今和次郎. (1948b). 農村生活改善を促進する機構. 家庭科学 No. 123. 家庭科学研究所
- 今和次郎. (1949a). 家庭生活の分析. 家庭科学 No. 130. 家庭科学研究所
- 今和次郎. (1949b). 家政学部とは. 家庭科学 No. 126. 家庭科学研究所
- 今和次郎. (1949c). 慣習を直すための指導. 家庭科学 No. 133. 家庭科学研究所
- 今和次郎. (1949d). わが国の家庭科の特性. 家庭科学 No. 129. 家庭科学研究所
- 今和次郎. (1950a). 家政学のために. 相模書房
- 今和次郎. (1950b). 農村の生活改善. 富民22(8)
- 今和次郎. (1951a). 家政読本, 岩崎書店
- 今和次郎. (1951b). 今後の家庭生活と家庭科教育

- . 信濃教育, 774
- 今和次郎.(1971). 家政学の学び方と教え方. 被服文化, 2-4
- 今和次郎.(2002). 野暮天先生講義録. ドメス出版
- 竹内芳太郎.(1971). “後記”. 今和次郎集 生活学. ドメス出版, 498-502
- Turkki,K.(2012). Home Economics-A Forum for Global Learning and Responsible Living. In Pendergast,D.,McGregor,S. and Turkki,K. (Eds.),Creating Home Economics Futures The Next 100 Years,44,Australian Academic Press
- 森本文恵.(1990a). 家庭科学研究所56年史 (I) 成
立期の変遷. 家庭科学57(1).70-73
- 森本文恵.(1990b). 家庭科学研究所56年史 (II) 戦
中・戦後(占領)期. 家庭科学57(3).62-67
- 森本文恵.(1991). 家庭科学研究所56年史 (III) 戦
後(復興)・新しい体制へ. 家庭科学57(4).540-
61
- 日本女性学習財団.(2011). 女性の学びを拓く一日
日本女性学習財団70年のあゆみ. ドメス出版
- 日本家政学会.(1984). 家政学未来構想1984 家政学
将来特別委員会報告書. 光生館
- 野崎有以.(2014). 戦中期における今和次郎の家政
思想. 日本家政学会誌 Vol.65(5), 209-219
- 内井乃生.(1971). 後記. 今和次郎「家政論」, ドメ
ス出版.521-532
- 内井乃生.(1988). 家政学より生活学へ—今和次郎
の生活学への道程—. 家庭科学, 55(1), 家庭科
学研究所, 44-51
- 内井乃生.(2011). “考現学から今家政学と今先生
との思い出”. 今和次郎採集講義. 青幻舎,240
- 日本学術会議健康・生活科学委員会.(2013). 大学
教育の分野別質保証のための教育課程編成上
の参照基準家政学分野, [http://www.scj.go.jp/ja/
info/kohyo/pdf/kohyo-22-h130515-1.pdf](http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-22-h130515-1.pdf)
- 渡瀬典子.(2009). 雑誌『婦人之友』「友の会」活
動における20世紀後半の農村生活改善—盛岡生
活学校と「東北部友の会」—. 岩手大学生涯学
習論集第5号, 1-11
- 山本松代.(1956). 農家生活改善の現状と家政学に
対する註文. 家庭科学14集, 9-16
- 山崎進.(1986a). 家庭科学研究所の過去・現在・
未来(その1), 家庭科学53(2), 32-33
- 山崎進.(1986b). 家庭科学研究所の過去・現在・
未来(その2), 家庭科学53(3), 2-4